

特集「夏」

「不在の夏」小野寺那仁

金がなかった。私は従兄弟の画家の家まで車を飛ばしていた。渓谷沿いの曲がりくねった道は蝉しぐれと朝の露に濡れていた。行き止まりに見慣れた祖父の手書きの傾いた看板がある。ヤナと呼ばれる鮎の漁場が従兄弟の夏の仕事だった。かつては天皇陛下が、最近ではぐっさんが訪れた。そういえば『エーゲ海に捧ぐ』の池田満寿夫も訪れたことがある。

天然の巨岩、奇岩が渓谷を堰き止めた淵からゴボゴボと水の流れる音がする。駐車場からすぐの彼のアトリエになっている岩場を覗いたがそこには顔料ひとつ見当たらなかった。どうやら今夏は岩場近くの高山植物とまではいかないけれども山でしかみられないシダ植物には彼は関心がないらしい。ここにもも鵜や水牛や孔雀にはお目にかかれぬ。かつて彼の画材になった小動物や植物を私は思い浮かべていた。急流のほとりは第一の岩場の部屋であるが、部屋といっても仕切りはなくそれぞれにハンモックが吊るしてあつていつでも眠られるようになっていてだけである。それから鉄製の金庫のような箱が置いてあり彼の書きかけの画布や顔料を雨水から守っていた。彼はその日の天候や画く対象から広大な敷地内に様々な部屋を所有しているのだ。

春から秋にかけての収入源である蜂の巣箱を幾つも見かけた。夏は蜂はどうなんだろう。蜂は老人たちに任せてある。彼はローヤルゼリーを盗み食いするだけだ。巣箱の部品というのは材木や板を切り刻んで組み合わせたものだ。実をいうとその部品を作製したのは私なのである。伯父から頼まれた。ネットで検索すると複雑な養蜂箱は数万円はする。只ではないけれども私は自分の仕事が暇で仕方なくなってしまうと時々引き受ける。前回、巣箱のパーツを届けた時、画家はいなかった。まだ雪解け水がちよろちよろ流れている季節で私はスノータイヤを装着していないから残雪のある坂道は怖かった。「息子は夏になったらくるかもしれない」と伯父は言った。私は画家からいったん支払った金を返してもらおうかと思いついた。それは元来、恥ずかしいことではあったが、この際、体裁を構ってられない。バブルははじけたのだ。村はずれの冠雪した一本松の事故前の姿を念入りに書いたその作品は東京の松屋デパートで開催された、とある展覧会で入選した作品で私が百五十万で買うことにしたのだが八十万を支払ったところでもうにもこうにも支払いができなくなり絵画自体は置き場所にも困るので画家の倉庫に眠っている。村はずれの一本松の由来を彼は知っているのか知らないのか。とにかく今は事故の影響からか根から腐ってしまい危険だということで八十歳を過ぎた私の父方の伯父が孫の敵である松を斧と鋸を使って村人の賛同者と共に切り倒したのだった。直径が五メートルはあるそのあたりでは知らない者はいない松であったが画家の描いたのは杉にしか見えなかった。確かに日本画とはいえ松を描くのは多少勇氣はある。江戸時代の襖絵や障壁画でもあるまいしということらしい。

集金できるものなら養蜂箱の分だけでもと思ったが生憎伯父は不在だった。駐車場には伯父の車がない。冬の分も未払いなので今回と合わせると五万円くらいにはなるのだが、伯父も養蜂は天候不順が祟って蜜が集まらないと電話では嘆いていた。だからちっとも期待はしていなかった。私は駐車場から夏の花の咲き乱れる小道を上がって養蜂の作業小屋の中を覗いてみる。そこも時々画家の部屋になる。けれども誰もいない。作りかけの養蜂箱が黒く燻されていた。

屋敷に行く前に昔やっていたバーベキューの小屋を眺めてみる。そこまで行くのは大変でありヤナに訪れた人たちが群がっている喧噪の中を歩いて行かなければならない。家族連れが全盛期とは比較にならないけれども普段の夏と同じように鮎を持ち帰ったり食堂の方で食べたりしている。かつては伯父も画家もそこで働いていたし私自身、夏休みには客にビールを運んだり魚のはらわたを抉り出したりしたものだ。けれどもどういふことかはよくはわからないがみな辞めてしまった。今は人を雇って経営しているそうだ。収入はいくらにもならない。そのわずかな収入も画家の画材に消えているという話だ。だから従業員たちは私がオナーの親戚とは気が付かない。知らない人たちばかりだ。調理場には顔を出さない。昔の囲炉裏が再現されていてそこで炉端焼きもしているが画家の部屋になることもあった。数年前はそこで描いていた。そのときのモチーフは俎板の上の魚だった。彼は魚が溶けて腐るほどに魚を眺めていた。あんまり眺めていたから銀色の鱗の鮮度が落ちて安っぽい色に墮落していったので画家は落胆してアルバイトの女子高生に新しいものと取り換えてくるように命じたが調理場の許可が下りなかった。私は絵心があるわけではないがどうやら彼は静物が得意なようである。日本画は動的な素材を描写するのには向いていないのか、いや、そうでもないはずだと思う。結局、魚の絵は断念された。モチーフにはなっていない。

そうだ、携帯電話を使えばいいではないかと思いついて私は掛けてみた。ところが圏外なのか電源がはいっていないのかちっとも繋がらない。たしか駐車場と藁葺屋根のヤナの食堂以外は圏外だった。周囲数キロで生きている人は僅かだった。まだ私の幼いころは道路も舗装されていなくてこのあたり一帯は店もほとんどなく農業と紙漉きとで生計を立てていたが、それでも今よりはかなりの人が暮らしていた。若い人は都会に出ていき、老人は歯が欠けるように寿命が来た。ほとんどの人は昔から住んでいるわけではなく、昔と違うのは縄文や弥生という意味で、戦国時代の落ち武者か、江戸時代の入植者か太平洋戦争時の疎開者がそのまま棲みついていいるらしかった。私の一族も二百年前にはこの地の地主だったようだが大正時代に空き家になったままだった。でも戦後は二百年前の家に住むことになったのである。空襲から逃げてきたのだ。すでに亡くなった祖父は東京でサラリーマンだった。最後の早慶戦の夜に祖母と知り合いになったそうだ。

人がいなくなった理由は土砂崩れも大きな要因で昭和四十年代には集中豪雨が起きて私の幼い頃の記憶に残る人たちは家押し潰されて亡くなった。別の親戚の家も弓道場があったのだがそれも跡形もなくなった。土蔵のなかの日本刀や弓や銃もすっかりなくなった。

駐車場脇の川も昔はなかったのだ。集中豪雨のために新しくできた川であり年々流れが大
きくなっている。(つづく)